

第二次世界大戦以後における日本（人）

の対外認識と外交政策

五味 俊 樹

(法学部助教授)

本研究が目指すところは、第二次世界大戦の終結より今日に至るまで、日本（人）が国際政治情勢をどのように認識し、いかなる対外政策を遂行してきたかを検証し、そこに内在するであろう日本外交のパターンを抽出することにある。

ところで、日本の近・現代史における対外問題を考える際、一つの基本的視座をもつことができるように思われる。すなわち、それは、日本の対外関係がアメリカを含むヨーロッパ諸国家間のパワー・ゲームによって規定される、という見方である。これはすでに実証済みの定説となっているわけではなく、仮説の段階にすぎない。それゆえ、本研究もその仮説を全面的とはいわないまでも、部分的に証明することを企図している。

それでは、日本の対外関係が欧米の諸国家間におけるパワー・ゲームによって規定されるとは、より具体的にはどのような意味内容であろうか。ひとまず、時代を第二次世界後限定することにしよう。この期における同地域のパワー・ゲームの主要なプレーヤーは、いうまでもなくアメリカとソ連であった。それは別の表現を用いると、米ソ両国の覇権闘争、すなわち「冷戦」と称せられる出来事にあたる。そして、それが開始した地は、アジア・太平洋、中南米、中東、さらにはアフリカといった地域ではなく、あくまでもヨーロッパにおいてであった。

ところが、その「冷戦」の舞台はただちにアジアへも飛び火し、朝鮮戦争のように「熱戦」にまで発展した。たしかに朝鮮戦争は内戦の部分をもちながらも、まぎれもなくそれは国際戦の性格を有していた。しかも、それは日本の対外姿勢の在り方に多大な影響を与えていったことは明らかである。

ヨーロッパにおける「冷戦」の始まりがアジアへも波及し、そして日本の外交にインパクトを与える、といった流れはほんの一例にすぎない。こうしたパターンは、それ以後の日本外交にも同様にみられる現象であるように思われる。日本は冷戦構造の中で、アメリカの陣営に入ることを余儀なくされた。そうになると、アメリカがソ連に対し、どのような戦略でのぞむか、いかなる政策を打ち出すかによって、日本の対外姿勢ないしは政策もかなりの程度、規定されることになる。これが前述した仮説から導き出される推論である。

たとえば、米ソ関係がデタントに進めば、日本の対外政策も同じ線に沿って策定され、反対に、米ソ間の緊張が激化すると、日本も万一の事態に備えようと嘗為努力することとなる。

前述のような仮説を設定し、戦後から現在に至る日本（人）の対外認識および行動がどのようなものであったかを跡づけようとするものである。研究のアプローチは、概ね次のようになろう。まず第一に、日本にとって国際環境に相当する、米ソを中心としたパワー・ゲームの動向分析は、第二次資料に依拠し、東西関係の潮流に照し合わせて、時代区分をおこなう。第二に、時代区分に則って日本（人）の対外認識の実態に迫る。その分析に際しては、月刊総合雑誌（『世界』『中央公論』『文藝春秋』等）や週間誌（『朝日ジャーナル』『世界週報』等）を用いていく。第三に、実際に繰り出される日本の外交政策に関しては、『外交青書』などの政府刊行物を中心に一次資料にあたっていくことになろう。

対象となる時代が四十五年に及ぶため、エポック・メイキングとなった事象に焦点を絞らざるをえない。しかし、もし国際環境（ソ連を含む欧米諸国間のパワー・ゲーム）と日本の対外政策との間に「相互連関」が見出されれば、仮説は立証されたことになろう。